

地理学者の条件

——ダニエル＝デフォーの場合——

辻 田 右 左 男*

Who is a 'Geographer' ?

——In the case of Daniel Defoe——

Usao TSUJITA

(1976年9月30日受理)

は し が き

ここ数年来、筆者はイギリスの作家ダニエル＝デフォー Daniel Defoe に大きな関心をもち、可能な範囲で、彼の著作や評伝の入手につとめて来た。1人の地理学徒として英文学の領域に足を踏み入れるのは場違いであるが、Defoe の作品に、17～18世紀のイギリスの地理学が集約的に投影されていると信じたからである。

筆者が Defoe に興味をもちはじめたのは、小・中学校時代机を並べた竹馬の友大塚久雄氏の示唆によるところが大きい。大塚氏は Defoe のロビンソン＝クルーソーを経済人(経営者)としてとらえ、ロビンソンが無人島においてイギリス人らしく困り込みをしたり、借方貸方のバランスシートをつくっていたとし¹⁾、日本の社会に新しいロビンソン像を移植した。それだけでなく、Defoe の『ブリテン周遊記』が産業革命前夜のイギリスの産業・農村の状況、とくにマニュファクチャーの様子を生き生きと描写していると²⁾指摘、わが国の経済史学に Defoe 研究の重要性を導入した。大塚氏はまた Defoe の産業都市計画³⁾にも注目しているが、経済史の側から興味のある Defoe の著作は、もしかしたら地理学に対しても何かを語りかけているのではないか。こういう期待が筆者を Defoe に drive させる1つの動機となった。

その後、イギリスの地理学者 Baker が「ダニエル＝デフォーの地理学⁴⁾」という論文を公にしているのを知り、これに勇気づけられ、1974年6月、人文地理学会地理学史部会で「ダニエル＝デフォーと地理学」と題し、中間報告の形で発表を試みた。京都大学楽友会館で行なわれたこの例会には、恩師小牧実繁博士はじめ、室賀信夫・西村睦男・海野一隆・高橋正など、わが国地理学史の代表的学者が出席され、会后、貴重な御示教に与った。

しかし筆者としては、この例会後、もう一度 Defoe の地理学を再掘するつもりは毛頭なかった。ただ「人文地理」(26巻5号)に掲載した研究発表の要旨に、1, 2 重大なミスがあることに気付き、機会があれば、これを訂正したいとは思っていた。

1. 地理学者の映像

ところが、1975年8月、国際地理学連合 IGU の地理思想史委員会(委員長 Ph. Pin-

* 地理学研究室

chemel) から手紙が届き、日本近代の代表的地理学者数名の書誌学的伝記 *biobibliography* を執筆するよう依頼を受けた。元学術会議議員渡辺光博士の推挙によるものであるが、また外国にはほとんど全く知られていない日本の地理学者の業績を世界の学界に紹介することは意味深い仕事であると信じ、非力を顧みず、これに携わることになった。しかし、ここでまず問題になるのは地理学者とは何かということである。

各国地理関係者が協力していっせいに作業をすすめる国際的な伝記編纂事業であるから、地理学者というものに対する共通理解がなければ、意味をなさない。そのためにこの委員会では、1972年 IGU モントリオール会議以来、数回討議を重ね、漸く成案に達した「地理学者について」という方法論的覚え書 *A methodological note* を筆者にも送ってきた⁵⁾。

この委員会案によると、「地理思想に対し顕著な貢献 *a recognisable contribution* を成した人はだれであっても地理学者と考えるべきである。単に大学において地理学の講座を担当し、地理学者としてみとめられている人だけに限らない。地図学者・地質学者・水文学者・経済学者・探検家・都市専門家・歴史家などの名前で呼ばれている多くの人々が今日までに地理思想に対して貴重な寄与をしている。彼らの貢献は終局的に当時の人が考えていたところよりいっそう重要なものであるかも知れない⁶⁾。」

このように地理学者を広義に解釈した上で、フランスでは歴史家ミシュレ、統計学者ルヴェスール、イギリスでは文献学者 G. アダム＝スミス、都市学者ゲディス、合衆国では地形学者 G. K. ギルバート、西部探検家ポウエルなど 20 人あまりの例をあげ、各国の主要な探検家、地図学者も当然地理学者のなかに含められるという。もちろん、これは伝記作製のための便宜的な概念規定であるが、これによって地理学者とはだれかということが、従来の漠然とした定義より一歩前進した形で把握されている。

筆者は当時この委員会となららの関係もなかったが（現在は *a corresponding member*）、委員会の打ち出した地理学者の概念は、筆者がなが年考えてきた地理学者像⁷⁾と全く符合し、偶然の一致に驚いた。それで、日本の地理学者の代表として、小川琢治・山崎直方・小藤文次郎・志賀重昂など狭義の地理学者のほか、木内信蔵博士が地理学のアウトサイダーと呼んだ⁸⁾気候学者岡田武松、民俗学者柳田国男、思想家内村鑑三、教育家福沢諭吉など広義の地理学者 5～6 人の名前を委員会に報告し、それぞれの小伝を 1980 年の IGU 東京会議を *time-limit* として執筆をつづけることになっている⁹⁾。

こんな重要な、国際的な作業を前にしながら、なせいまごろ、それも相違いの外国の作家 Defoe をわざわざ登場させねばならないのか。もともと専門的地理学者と紙一重の地理学的教養をもつ非地理学者も多いが、作家であって同時に地理学者という例は比較的少ない。地理学者が委員会案のようなものならば、事は簡単であるが、真の地理学者であるためにはもっときびしい、*strict* な条件が必要である。

たとえば、正鵠を得た地理的世界観をもつことが絶対に必要だろうし、フランス学派のいう芸術家的才能文学的表現力 *parties d'artiste, l'expression littéraire*¹⁰⁾も地理学者の資格として欠かせない。さらには合衆国のライトが強調する想像力¹¹⁾をはじめとし、ハウソーンが『地理学の本質』のなかで記している地理学の史的展望、地理学的資料の選択と処理、地域概念、世界の諸地域の組織化の方法¹²⁾など地理学者の具備すべき条件はこのほかいくつもあるであろう。これらのうち一部は先天的のものであって、訓練だけで達成し得ない資質も当然含まれている。景観の絵画的描写などは、恐らく天賦の才能であり、修練ではどうすることもできない。しかしかつてサウアーが述べたように¹³⁾地理的な関心と性癖 *awareness and bent* は地理学者と称する者の不可欠の条件であろう。

ここで見ようとする作家 Daniel Defoe は上のような近代的地理学者の装備すべき諸条件を、すべて一身に具有したとはいえ、単に地理学の愛好者 Amateur にすぎなかったかも知れない。しかし、17~18世紀という時点においては、時流を抜く豊富な地理的知見をもち、巧まざる地理学者的資質によって、地理学的業績を達成したという意味においては、地理思想史の上から彼を等閑視できないのではないか。このよな視点から、以下 Defoe の地理学の諸相を検討していきたい。

まず順序として Defoe の生涯を一べつし、次に地理的要素の濃厚な彼の作品 2, 3 を取り上げ、最後に彼の最も特徴的な作品と呼ばれ、全編に地理学が溢出している『ブリテン周遊記』について述べてみたい。

2. 商人デフォー

Daniel Defoe は 1660 年、獣脂ろうそく製造人の長男としてロンドンに生れた¹⁴⁾。清教徒革命を行なったクロムウエルの死後 2 年、チャールズ 2 世が即位し王政復古の成った最初の年である。Defoe の幼時、父がイングランド教会から離脱し、いわゆる非国教派 (Dissenters, 広い意味の Puritans) の一員となったため、向学心のあった Defoe も大学へ行く望みは自動的に絶たれた。当時非国教派は、Oxford や Cambridge などの大学で学ぶことも、教えることも許されず、かれらがその子弟の教育のために、イギリスの主要都市に設立した Academy¹⁵⁾と呼ぶ私立学園で学ぶほかはなかった。

Defoe は 14 才から 19 才までの 5 年間、名教育家、のちに Harvard 大学の副学長となった Morton を指導者とするロンドン南郊 Newington Green のアカデミーで学び、モルトンの人格的影響を受けた。当時のイギリスの大学はスコラ的な思弁哲学の学習を主としたが、このアカデミーでは、キリスト教関係の科目に重点を置きながら、地理学はじめ歴史、数学など実用的な科目も教授されていた。ここで学んだ地理学は、後年 Defoe が地理学に傾斜する 1 つの遠因ではなかったかと思われる。イギリスの歴史家 T. S. Ashton はアカデミーにおける人間形成的役割を高く評価し、アカデミー出身の有名人の筆頭に Defoe の名をあげている¹⁶⁾。ただし Defoe に次いで、アシュトンが記しているマルサスは『人口論』の著者 T. R. Malthus (オックスフォード大学出身) とは同名異人で「人文地理」において、これを軽々に『人口論』の著者としたのは、筆者の重大な誤認であった。

アカデミー在学中、Defoe は父の意志を尊重し、非国教派長老教会の教役者を志望していたが、1683 年きっぱりこれを断念、父と同じような商人 tradesman¹⁷⁾ (厳密には merchant にあたる商人ではない) の道をえらび、その 20 代 30 代は商業で身を立てた。彼は終生、商業の重要性をみとめ、商業こそがイギリスを繁栄に導く唯一の経済活動であることを主張したが¹⁸⁾、イギリス商業の末端に連なる 1 人の商人としては、成功したとは言えず、むしろ失敗の連続であった。たびたび仕事を変え、肉屋の株を買ったかと思えば、雑貨に手を出し、ワインの貿易に熱中するかと思えば、煉瓦の製造を始めるという風で席の温まるひまもなかった。多額の持参金をもつ女性と結婚し、8 人の子供をもうけたが、結局一生償うことのできない借金を背負いこみ、家庭的には恵まれなかった。

生まれながらの Projector¹⁹⁾と言われるぐらい計画好きで、次々と新しい企画を抱きながら、足が地に付かず、「私は 13 回金持になり、13 回貧乏になった」という有名なことばで、波瀾に富んだ半生、事業の浮沈を告白している。その上、彼の分身であるロビンソンの口を借りて、「外国へ行きたい」「世界をかけめぐりたい」とくり返し語ったように一種の放浪癖 the wandering disposition があつたらしく、商用に事よせて、イギリス国内はもち

ろん、当時旅行が極度に困難であり、危険でさえあったスペイン²⁰⁾・ポルトガルにまで足を延ばし大いに地理的見聞をひろめた。一時オランダとの貿易を試み、ロッテルダムに向う途中、アルゼリアの海賊に襲われ、短期間海賊とともに起居するという珍しい体験もしている。この体験は一生彼の記憶から消えず、晩年の大作『海賊通史²¹⁾』や『海賊シングルトン²²⁾』を生み出す素地となった。

商売の不振にあえぎ、その気晴らしに時勢を風刺する詩や雑文を書きはじめたが、折も折、Defoeにとって願ってもないうれしい時期が到来した。1689年「寛容法」が制定され、同95年「出版認可法」廃止にもなって言論・出版の自由が保証され、その上政府が民間ジャーナリストを起用して世論指導・情報収集にあたらせたため、DefoeやSwift²³⁾らは水を得た魚のように、イギリスの情報社会に踊り出た。イギリスのジャーナリズム史上最初の隆盛期といわれる時期であり、Defoeは商業に未練を残しながら、以後文筆活動が彼の生活の支柱となった。

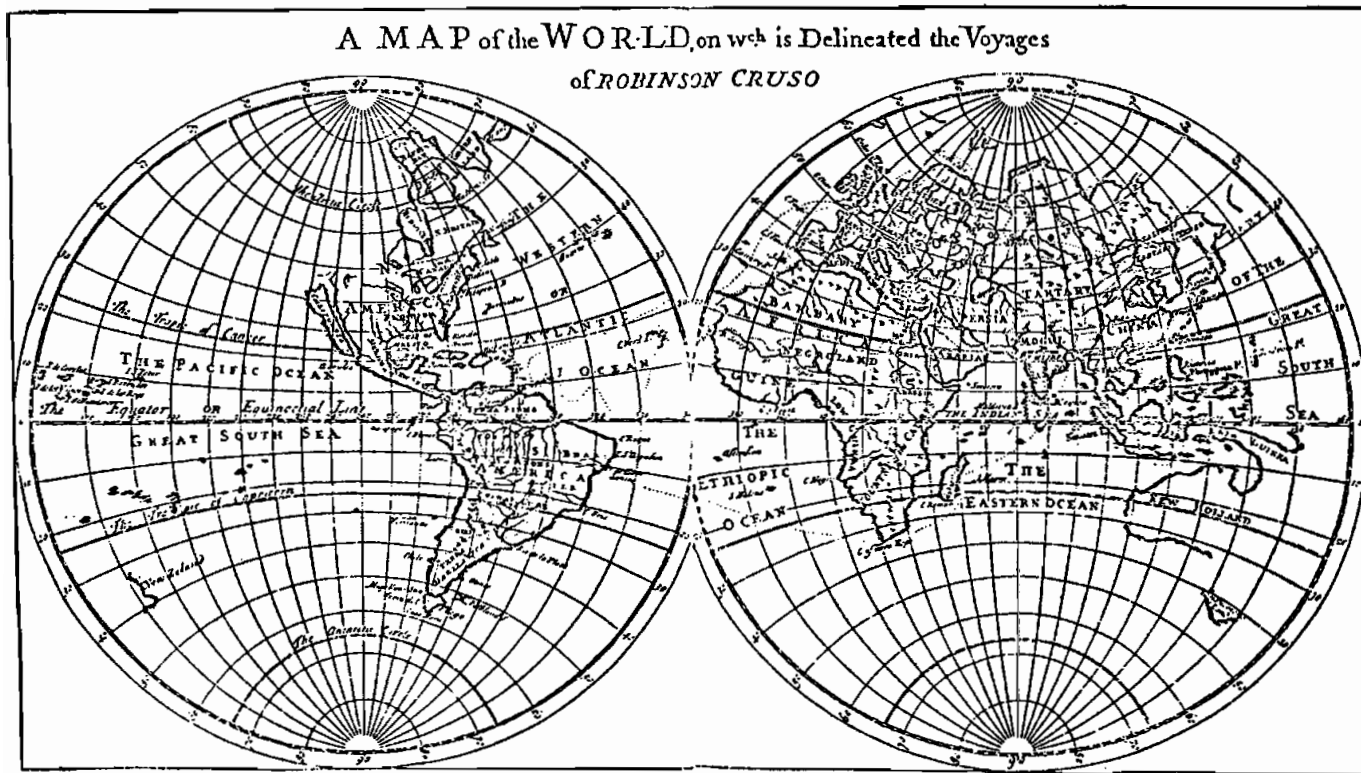
政治家ハリー Harley²⁴⁾の庇護のもと、その党新聞 The Review のため、数年間継続して週3回の論説を書くなどタフで超人的ともいえるジャーナリストの生活が続けられた。この時期に彼の筆になる論文数は400を越え、その全部が題名入りで記録に残っている²⁵⁾。おもに政治・経済・社会に関する論説であるが、まれに地理関係のものもあり、また彼の宇宙旅行の夢を托した「月世界への旅行²⁶⁾」という珍奇な論文も見出され、宇宙開発の先駆者でもあった。

ペンをもつことが日常茶飯事的になっていた彼は、時には反対派の新聞にも寄稿して顰蹙を買った。さらには一時期政府の政治スパイ²⁷⁾としてイギリス各地に出没し、とくにイングランドとの連合 Union (1707) を目前にしたスコットランド各都市に潜入、住民の動静を探った。非合法かつ不本意な野外調査 Field work ではあったが、これによって地理的事物を見る目が鋭敏になり、geographer の素質が啓培されたことは疑を容れない。わが国に例をとれば、幕末の地理学者近藤重蔵がその若き日幕府の密偵(御先手与力)として西日本の城下に潜入、しばしば路上や塹堤に野宿して²⁸⁾、各地の政情・民心を鋭く、適確に把握する training を積み重ね、後年蝦夷地探探、『辺要分界図考』の著作などの地理的業績に発展させたことと幾分似ている。

20年近いジャーナリスト時代に、Defoeは社会の各階層の人々と接触、そのなかには彼の驚くべき地理的知識の情報源となった当時第一級の地理学者・地図作者も相当数含まれていたことはほぼ確実である。かれらの直接間接の援助なしには、Defoeのすばらしい地理的著作は絶対に生み出されなかったであろう。まれには貴顕・紳士・淑女との面談もあったが、彼の sensible で human²⁹⁾ な目は主として社会の底辺に注がれた。歪められた社会環境によって必要悪を積み重ねていく浮浪人・大道芸人・盗賊・売春婦らと面接し、後年彼等の口を通して社会の病弊を衝くままに社会史的小説を幾編となく生産した。

3. 作家活動

ながい記者生活に終止符を打ち、彼が作家としてデビューしたのは、すでに老境に入った59才のことである。決してスムーズに日の目を見たわけではないが、ある出版者が冒険を覚悟で、1719年4月彼のロビンソン物語を上梓した時が、小説家 Defoe の記念すべき発足年となった。この前々年、南米西岸ヴァルパライソ沖のジュアン・フェルナンデス島に漂着、そこで4年間を送ったスコットランドの航海士セルカーク³⁰⁾の物語が出版されており、これにヒントを得て書き上げたのが、例の『ロビンソン＝クルーソーの冒険』であ



第1図 ロビンソン＝クルーソー第4刷の世界地図
 ロビンソン＝クルーソー島は南米北岸オロノク（オリノコ）河口付近にある
 （オックスフォード版 Robinson Crusoe 1972版による）

る。もちろん Defoe は事前にハックルードが編集した航海記録³¹⁾やダンピェルの周航記³²⁾を読んでおり、セルカークの物語はロビンソン執筆の誘因となっただけであるが、これがみごとにヒットしたのである。

Defoe にとって幸運であったのは、彼自身と同じような中産的生産者層が当時、イギリスの主要な読者層として抬頭していたことである。ロビンソンがまるで無人島に送られたイギリス新興ブルジョアジーのチャンピオンのように、きわめて堅実に島の経営にあたり、清教徒的宗教心を随所に発揮したことに熱狂的な拍手を送り、それ以来、聖書に次ぐ世界的ベストセラーズ³³⁾の1つとして今日に至っている。

『ロビンソンの冒険』の成功に刺戟され、これを刊行した4か月後の1719年8月に『ロビンソン』の続編を出したが、続編は彼の地理的知識が誇示された感があり、正編ほどの人気は得られなかった。続編の売れ行きは、正編の2万分の1³⁴⁾にしかすぎなかったという説があるほどで、地理学的にはとにかく、一般批評家が対象として取り上げてきたのは、この正編に限られる。

1719年8月の正編『ロビンソンの冒険』第4刷には、当時最も新しく最も正確と考えられた世界地図³⁵⁾を付録として添えたが、これは正編には地理的な誤りがあるという批評に対する Defoe の1つの demonstration であったかも知れない。続編が必要以上に地理を盛りこんでいるのも、この批評を気にしていたためであろう。たびたび地理学者・地図作者を作中に登場させ、記事の正当さを証明させようとしているが、この場合はすこし nervous になりすぎた Defoe の地理学への執心が災して結果的には不評を招いた。

ロビンソンの無人島経営は、マルクスがその『資本論』のなかで取り上げ³⁶⁾、経済学はロビンソン物語が好きであるという有名な発言をしているほか、フランスのルソーはその『エミール』のなかで子どもに読ますことのできる唯一の物語であると称讃した。同じくフランスのカミュもロビンソン物語はあまり偉大すぎてかえって批評家を混乱せしめるのだという弁論を唱えているが、反面、宮廷詩人や貴族的作家は、ロビンソンをいっせいにこきおろした。たとえば詩人ポーブなどは彼を軽べつすべき三文文士族 Grub Street Race³⁷⁾とした、またしばしばロビンソン物語と比較されるガリバー旅行記の著者スウィフトは、成り上り者にひとしい Defoe の名前を口にするのさえ汚らわしいとし「さらし台 pillory³⁸⁾に上ったあの男、名前は忘れたが」と憎らしげに書いている。同じような風潮はロビンソンより約半世紀おくれて刊行された『国富論』(1776)の著者アダム＝スミスにも引きつがれ、ロビンソンはもちろん、イギリスの経済的繁栄を願った Defoe の他の論文も、『国富論』では完全に黙殺されている³⁹⁾。

ロビンソンに関する諸名家の批評はまとめられて数冊の書物になっているが、このロビンソンを初穂として、以後死に至る12年間に Defoe は実に30篇にのぼる大作を世に送っている。大器晩成型 a late developer といえればそれまでであるが、60才を越えた老人 Defoe にとっては並々ならぬ energy の放出であった。

30篇のなかには、小説の形をとるものも数篇含まれているが、これとても前述のように社会の病弊を鋭く批判した realistic な作品であり、彼を単に小説家の範疇でとらえるのは適当ではないであろう。残りの20数篇は旅行記でなければ、商業論・都市論・災害記録など直接間接地理学に結びつく論文⁴⁰⁾または記録文学で、「文芸復興以来普及していた装飾的有閑的文体を一擲して、ひたすら事実を写したように書いたことは彼(Defoe)の大いなる功績であった⁴¹⁾。」と斉藤勇博士は述べている。

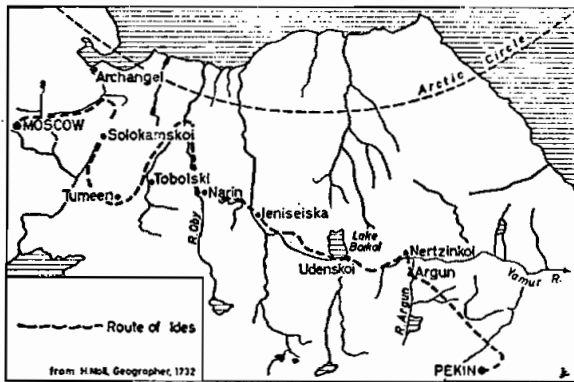
一生不遇のまま、1731年、71歳を一期としてロンドンの貧民窟で生を終えたが、死後直

ちに負債償却のため処分された彼の蔵書の競売広告の文章が記録に残っている。これによると「農業・商業・航海・博物学・鉱山学の珍書・稀書約500冊」とあり、地理書については記されていないが、競売人の目の届かなかった貴重な地理書・地図類もこのうちに含まれていたことであろう。地理書の文字はなくとも、地理学周辺の実用的な学問に身を委ねた彼の geographer らしい姿がこれによって彷彿でき、まことに興味深いものがある。

4. Defoe の架空旅行記⁴²⁾

作家時代以後の Defoe の作品には、多かれ少かれ地理学的要素が見出されるが、一見地理学とは無関係な小説類にも環境設定、環境描写の巧妙さが指摘されている。その上巻春婦『Roxana』(1724)、5度も結婚したあばずれ女『Moll Flanders』(1722)などの小説において、主人公をヨーロッパの各地に移動させるという手法をとり、これによって Defoe はみずからの地理的知見を吐露したかったのであろう。またこの2つの作品の女主人公の名前が、当時地図作者として有名であった Moll⁴³⁾ や Bleau⁴⁴⁾ (Roxana の未婚時代の名前は Mademoiselle de Belean) の名前と酷似し、Flanders が当時地図製作の中心地であることと併せて、Defoe が意識的にこれらの名前を襲用したと考えられる。

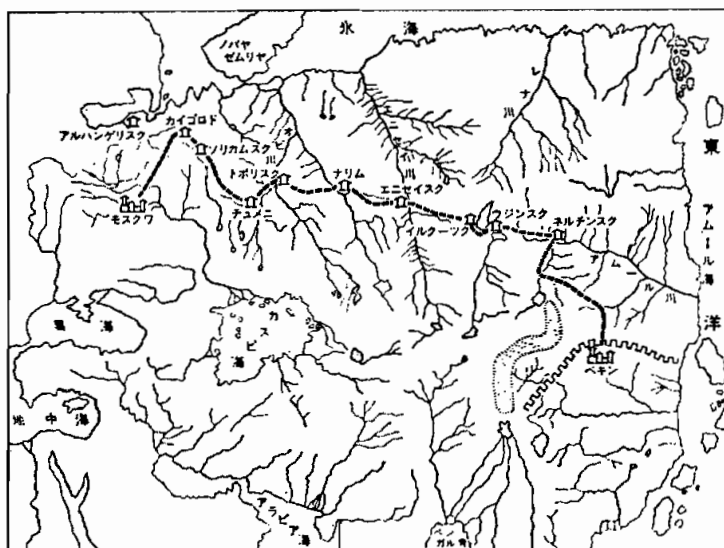
前記地理学者 Baker が Defoe の地理学的著作として取り上げたのは、『ロビンソン』続編『海賊シングルトン』および記録文学『あらし』The Storm (1704) の3つである。このうち『あらし』は1703年イギリスを襲い、各地に被害を出すだけでなく、イギリス海軍を一時壊滅させるほどの猛威をふるった暴風の記録であるが、Defoe はその災害状況を描写するに先き立ち、古今の科学書を引用して、風のメカニズムを述べるなどさながら一巻の自然地理書のような形式をとっている。そして世界気象学史のクラシックとしてしばしば引用されこの嵐を Defoe's Storm と呼んでいる⁴⁵⁾。



第2図 ロビンソン行程図 (Baker による)

ロビンソン続編『その後の冒険』The Farther Adventure of Robinson Crusoe (1719. 8月)で地理学的に最も問題となるのは、すでに70歳に垂んとする老ロビンソンが、ペキンからシベリア横断の隊商に加わり、ヨーロッパロシアのアルハンゲルスクまで欧亚両大陸にまたがる長途の旅をを試みる記事である。この旅行記を草するにあたって、Defoe が用いたおもな資料が、

ピョートル大帝の命を受けてシナに旅行したデンマーク人イデスの旅行記⁴⁶⁾およびアプリルの『欧亚諸国旅行⁴⁷⁾』であったことは、Baker、船越昭生両氏ともに認めているところである。Baker の作製したロビンソン行程図⁴⁸⁾、船越氏原図のイデス行程図⁴⁹⁾を比較すると細部をのぞいて完全な一致を示す。しかしイデスがモスクワからペキンに向って旅行した径路を、ペキンから逆に西に向ってロビンソンを歩かせ、イデスの記事を多少修正して用いただけでは、一般に高水準の地理的知識をもっていたイギリスの読者にはならぬ説得力もなかったはずである。



第3図 『イデス旅行記』におけるイデスの行程図（船越昭生氏原図）

G. テイラーが list up⁵⁰⁾ したように、イギリスには16世紀以降、Defoe の時代までにすでに 200 を越える多数の地理書が刊行されていた。そのいくつかを仔細に読破し、また著書はなくとも当時一流とみなされた地理学者との交流により、かれらから最新の地理学的情報を吸収し、いわばこれら知られざる地理学者の spokesman となって、読者にも納得の行く地理学的知見を、ロビンソンの口をとおして語らせた。これは当時未知であったアフリカ中央部を、確信をもって東から西に旅行することができたシングルトン⁵¹⁾についてもいえることであるが、当時地理学的に未決定 pending であった重要な問題に関し、それぞれ主人公が discussion をするような situation を設定しているのも、地理学者的発想である。たとえばシベリアでは、アジアとヨーロッパの真の境界はどこであるかを議論させ、アフリカではナイルの水源地についての討議が行われている。普通の小説であれば、何回も主人公を立ちどまらせて、筋を運ぶ上ではなにの利益にもならない地理学上の議論をさせることはない。

Defoe は「全世界を手取るように知りたい」‘all the world at his fingers’ end’ と言っていたが、これは決して彼の妄想ではない。「彼の著作は18世紀前半において最高の教育を受けたイギリス知識人の地理的知識を忠実に反映している」と Baker が述べた⁵²⁾ように、恐らく当時の専門的地理学者に劣らないぐらいの該博な地理的知識をもっていたに違いない。彼が5か国語に通じていたことも、世界地理を知る上で大きな武器となっていた。

ことにアフリカの中央部は、19世紀に至りリヴィングストンなどの探険を待つまで、ほとんど未知の地域であったから、そこに山・川・湖・砂漠・住民を配置し、それらを目撃したように描写するのは容易ではない。Defoe の論敵 Swift が「かくて地理家はアフリカの地図、そのうつろなるほとりに蛮族を立たせ、人影もなき野や山に、村のなければ象住むという⁵³⁾」という有名な詩を書いたのは、暗に Defoe の『海賊シングルトン』の意外性を皮肉ったのではあるまいか。Swift のこの詩の出所、シングルトンとの関係はまだ明かにし得ないが、Swift が Defoe より7年年少の同時代人、かつ犬猿の間柄であったことを考えれば、こういう想定もあり得ぬことではない。

Baker が入念に考証している Defoe の『あらし』についてはさきにも一言したが、彼の記

録物としてはこれと同じジャンルに入る『疫病流行記⁵⁴⁾』A Journal of the Plague Year (1722) をここで取り上げる。これは Defoe がまだ4～5才の幼児であった1665年、中世における黒死病(ペスト)の再来のように、ロンドンを襲った bubonic (下腿部リンパセンの腺腫, 鼠によって伝染した) という疫病の猖けつぷりをまのあたり見るように詳細に記したルポルタージュ文学である。Defoe がロビンソン=クルソーの著者でなくとも、これだけで彼の文名を不朽ならしめたであろうといわれるぐらいの傑作で、一読鬼気せまる迫真の描写である。

60才を越えてから、わざわざ半世紀も前に起きた災害に挑戦しようとした彼の意図は分り兼ねるが、恐らくたまたま入手した当時の記録に興味をもち、例の想像力にものを言わせ、一気に書き上げたものと思われる。ロンドンではこの災害の翌年1666年市街を完全に焼失した大火があった。Defoe はなぜこの大火を見落とし、悲惨きわまる前年の災害に立ち向かったかという疑問も提出されているが、この書物における彼の資料処理の鮮かき、災害の地域を全面的に把握、地誌的な取扱い方をした点など、作家的天分と地理学的方法とが渾然一体となった名作とされている。

5. ブリテン周遊記

Defoe が死没5年前に完成した『ブリテン周遊記』A Tour thro' the Whole Island of Great Britain (以下 Tour とよぶ) は、ロビンソンの盛名のおかげにかくれ、最近までふしぎなほど neglect されてきたという。イギリスにおいてさえそうであるから、わが国ではなかく問題にされず、翻訳も出ていないのは当然である。

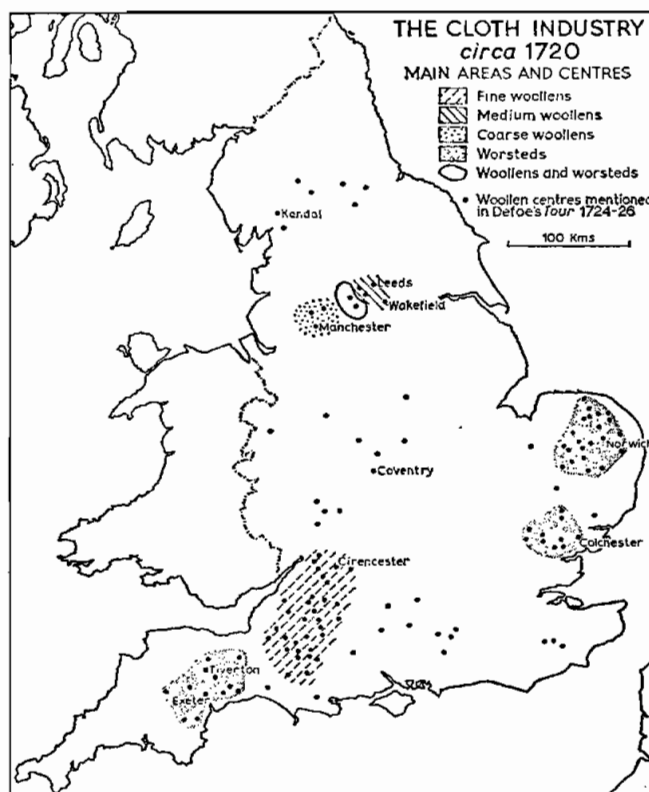
Defoe としては彼のすべてを賭けて世に問うた畢世の大作で、分量的にも彼の他の著作をはるかに上回っている。彼自身、これは17回の巡回旅行 circuit と3度の周遊 general tour の集成であるといっているように、決してイギリス全島を一度に circle 的に巡歴したのではない⁵⁵⁾。現在と違って18世紀初頭のイギリスの陸上交通はきわめて不便な状態にあり、ロンドン在住の富裕な階級でも、たかだか数百キロしか離れていない西海岸に住む友人や親戚と、一生の間4～5度手紙の往復ができればよい方で、もし彼らに会いに行こうと思うならば、ヌビア砂漠を横断するほどの危険を覚悟しなければならなかった⁵⁶⁾という。それゆえ、老齢のDefoe が Tour を書くために、あらためてイギリス全城を旅行するなどには不可能に近く、この書物の大部分の資料は、商人時代、新聞記者時代エネルギーに歩きまわったときに得られたものであり、なかには、old-fashioned となった資料もあったはずである。

そういうかびの生えかけた古い資料をタイミングよく、1720年代まで引きさげて、まのあたり見るようにイギリスの風土を描写したのであるから、Defoe はまさに魔術師的な筆力をもった地理の神様 The God of Geography⁵⁷⁾ といってよい。Pat Rogers が Penguin 版 Tour で推定図を示したように、Defoe の巡回旅行は、ブリテン島に多くの小さな輪をはめこんだような形で行われ、その最初のサーキットは、1722年4月3日にロンドンを出て東アングリアを北上し、フェン湾の南東部から、南に曲ってロンドンに帰着するというルートをとっている。この部分については、恐らくこの時期に実際に旅行を試みたのであろうが、ロンドンから遠く離れた地域は、旅行記の形をとりながら、彼が新しく編集した地誌であったといえる。年代的には大きな振幅はあったが、Defoe にとってはブリテン島のどこもが曾遊の地であり、新しい資料を付加することによって、イギリスの地表に風土と人間とが織りなす新しいドラマを創り上げた。そしてイギリスに存在する最も偉大な旅行記、古い国土を近代的な目でとらえた最初の書物という声価を得ている。

イギリス人にとってそのように価値ある旅行記であっても、時間的にも空間的にも遠く隔たっているわれわれ日本人にとって、この旅行記はなにを物語るのだろうか。われわれとしては、稀有の地理学的天分をもった Defoe がいかなる態度・方法をもって、まだ地理学の本質が十分明らかにされていない時代、ほとんど先人未踏のイギリス全島の地誌に challenge したかを知りたいのである。具体的には、彼は風土のなかでなにを重視し、どのような方式でそれらを描写し、全体として地誌のあるべき姿をどのように提示したかということである。

彼は Tour のなかで「古めかしいこと antiquity や歴史を書くことは私の分限外である。私の仕事 my business は一定の場所の現在の状況を記すことである」とくり返し述べている。また（地誌）叙述にあたり「短く、簡潔、平明に重要なことを書くのが絶対に必要」と言いながらも、およそ美しいもの（景色）、意味のあるもの、とくに人間に関係のあるものは何一つ見逃がさない鋭敏周到な観察眼の持主であった。ジャーナリストとしての能力というより、これは、まさに彼の地理学的精神の発露といえないであろうか。

もちろん重要な地域、重要な産業については微に入り細をうがった描写もしている。大塚久雄氏のしばしば引用するヨークシャーの羊毛工業の項などは、地理的位置から始め、地形・集落の離散、大きさ、囲いこみ地、面積、住居の分散と毛織物製造との関係、他の地域との比較、天候、流水、道路、生産の過程、流通経路、農牧景観など、わずか2頁の



第4図 18世紀初頭におけるイギリス繊維工業分布図
 ・はデフォーが Tour のなかで記している羊毛工業地 (Darby 原図)

スペースに地理学的考察に値するすべての項目を網羅し、全体として大塚氏がいうように、産業革命前夜の「農村工業」地帯の景観が目に見えるようである。

スターブリッジ Sturbridge の市場 Fair の描写も秀逸で、当時の Fair がどのようなものであったか、売手買手がいかに振舞ったか、まさに市場の概念 idea を伝えた⁵⁸⁾ものとしてよく引用される。地理学者スタンプが輝やかなしい描写 illuminating description として推賞したイギリスの道路状況は⁵⁹⁾、地質・土木の専門用語⁶⁰⁾を駆使して堂々と描写され、地理学周辺科学に対する Defoe の日ごろの精進振りが察せられる。

経済史家 G. D. H. Cole は、Defoe は商人の目をもって、イギリスを見ていたと指摘するが、農牧水産・工業等の生産状況については、彼の観察と描写はひとときわ光彩を放っていた。たとえば、小麦はどの農場に育ち、どういう径路で市場に運ばれ、どのように消費されるかを見届けねばやまなかった。100 を越える羊毛工業地を1つ1つ訪ねてその生産状況を report したが、この Defoe の記載をもととし、地理学者ダービーは18世紀初頭のイギリスの羊毛工業図⁶¹⁾を作っている。

Defoe の Tour はもちろん彼の直接的な (first hand) 風土観察の産物であるが、巻中しばしば当時流行した地誌や旅行記の名をあげ、彼がそれらを参照したことを示唆している。かなり以前に出たカムデンのイギリス地誌⁶²⁾や著者不明の「地理学辞典」からの引用と批判がかなりあるが、女性ながら颯爽と騎馬旅行をした同時代の有名な旅行家セリア＝フィエンスの動静にはふれていない。

フィエンスのイギリス旅行記⁶³⁾は、Tour とともに18世紀初頭のイギリスの地理を vivid に描写した著作として有名であるが、彼女は「彼女自身の鼻 (食欲) に引っ張られた旅行者」と呼ばれるように、文体は繊細華麗ではあったがある特定の地域を丹念に描こうという野心はなく、at random に記述の地点が選択された。この点 Defoe の Tour はウェールズを含めたイギリスの全域を cover し、当時イングランド人から未知の地 terra incognita と考えられていた⁶⁴⁾スコットランドの地理まで詳細に描写している。スコットランドの地誌としては最初のものといわれるが、彼の政治スパイ時代に目撃し、収集した data がここで活用されたのである。

ヨークシャーの農村工業の記事にその一例がみられるように、Tour における風土描写はまことに整然としていて、いわば有機的な展開がなされている。これについては、Tour より70年ほど早く書かれ、Defoe のところに英訳もあった近代地理学の始祖ヴァレニウス B. Varenius の『一般地理学』Geographia Generalis の影響を多分に受けたと思われる節がある。すなわち Tour における地域・都市の記載項目が、ヴァレニウスの地誌の体例⁶⁵⁾とあまりにも類似し、Defoe はヴァレニウスを意識し、これに follow するように Tour を書きすすめたのではなかろうか。以前に Storm を書いたときも間接に、ヴァレニウスを引用し、遠くアリストテレスの気象学 Meteorologica にまで溯源したぐらいであるから、ヴァレニウスの地誌の項目を見、わが意を得たとばかり Tour の執筆にこれを応用したのではあるまいか。Defoe は常に利用し得べき最良の資料を用いたことは論者の一致した意見であり、この場合も、Defoe の Tour の背景として当時第一級の地理書、ヴァレニウスの地誌の項目が1つのモデルとして存在していたことを仮説としてここに提出し、識者の教示をまちたい。

Tour は「現在の状況」に焦点をあてて書かれたが、それ故に後代からみれば、それはまさに歴史地理学の好資料であり、歴史家トレヴェリアンをして、Tour は歴史家の宝庫とまで言わしめている。東部アングリアの湿地帯で漁獲されたウナギその他の魚類が、木

桶に積みられ、ロンドンの市場に運ばれて行ったなどの牧歌的風景は、現在のイギリスにもはやみられない。イングランドの大きい村にすぎなかったマンチェスターが発展したのは、早くから羊毛工業の芽生えがあったからと指摘し、反面、没落の一途をたどる古い町々の姿を如実に描写した。そして「日一日変貌してやまないイングランドを完全に記述することはできないとし、かえって変化を喜ばしいこととして受けとめた。なぜなら変容のうちにこそ、イングランドの生命、発展があると Defoe は考えた⁶⁶⁾。」

Defoe の home ground であり、彼の最初の circuit の最終ゴールにあたるロンドンの記事はさすがに詳細をきわめ、刊本で60頁に及ぶ大都市論⁶⁷⁾である。Defoe はロンドンをトラヤン時代のローマに比定し、ローマがその巨大さのゆえに怪物化したと同じように、この桁外れに、しまりなく out of shape, uncompact 膨脹していくロンドンは今後どうなるのか。世界のいかなる場所にも例を見ないほど新しい広場、新しい街路、新しい建造物が急速に作られていき、とどまるところはない。これはロンドンにとって悲惨事 disaster である。ウィリアム=ベティ郷が算定したロンドンの埋葬・洗礼数⁶⁸⁾に例をとれば、1666年およびそれ以前の埋葬数は年17,000から19,000であったが、1723年には洗礼数19,203、埋葬数29,197という憂うべき数字が出ている。Defoe は彼の都市地理の最後を例のように数字を多用して⁶⁹⁾総括している。

Defoe の Tour は1779年までに9版を出し⁷⁰⁾、Defoe の死後、何人かがそれを補訂しているが、Defoe の original なものにくらべて学術的価値は低下しているという。Tour があまりにも地誌的でありすぎたためか前言のように、20世紀以前はそんなに名著とはみなされなかった。しかし Tour が一部では一種の guide-book として用いられ、イギリスにおける国内旅行を刺戟し、さらには現在いう観光産業 Tourist industry を誘発した形跡があると、Pat Rogers は述べている⁷¹⁾。もちろん、Defoe 時代のすぐあと産業革命がつづき、これとともに週末旅行の風潮が一般化したことを思えば、Defoe の Tour だけがイギリス人の旅行熱をあふりたてたとはいえないが、よき旅行記が同時によき地誌であり、よき案内書であることは、イギリスも日本も異るところはない。

柳田国男氏はかつて紀行文の良否は、地誌的要素の多少によって決定されると述べ⁷²⁾、Defoe の Tour とほぼ同じ時期に書かれた貝原益軒の紀行文⁷³⁾を地誌的旅行記の模範例とみなしたが、すこしあとの吉田松陰の数編の旅行日記⁷⁴⁾についても同じことがいえる。このような地誌的旅行記を書くことのできた人たちは、それだけで最も狭義の地理学者 (geographer, 土地の記述者) の名称に値する。しかも Defoe の場合は他の多くの地理学者的資質も加わり、いみじくも彼自身好んで用いた complete という語を冠した 'a complete geographer' と呼べるのではなからうか。IGU 委員会のいわゆる顕著な寄与という点では、現在少くとも、史学・経済学・地理学の3つの側から注意が集中している Tour だけで十分である。意外にも日本の地理学界では、これまで Tour の地誌学的価値が問題にされなかったが⁷⁵⁾、わが国に真の意味の地誌が生み出されるために、他山の石として Tour の再認識がせむとも必要である。この小論がその導火線となれば幸いである。

む す び

以上、地理学者とは何かという、古くかつ新しい問題の解明を伏線として、Tour はじめ Defoe の地理的な2,3の著作の紹介を試みた。Defoe の論敵 Swift のダフリンにある墓石の碑銘には Swift みずからえらんだという「旅人よ、汝の道を行け」(Abi viator) の文字があり⁷⁶⁾、ガリバー旅行記の著者にふさわしい碑文であるが、もし Defoe が同じ立場

に置かれたとしたら、恐らく彼の一生の業績の鍵となった地理学を追慕し「一人の地理学者」A Geographer という文字をえらんだことであろう。

(1976. 9. 30稿)

注

1. 大塚久雄「経済人ロビンソン・クルーソウ」(『社会科学の方法』1966, 所収)
2. 大塚久雄『欧洲経済史』(弘文堂)1956, p. 138. 同書(岩波版)1973, p. 115以下.
3. 大塚久雄「デフォウの産業都市計画」『大塚久雄著作集』第6巻, p. 10.
4. J. N. L. Baker, *The Geography of Daniel Defoe*, 1931.
5. IGU, Commission on the History of Geographical Thought, *Geographers, Or A methodological note on the writing of an international bibliographical work on geographers.*
6. Anyone who made a recognisable contribution to geographical thought may be included, and not only those who were described as geographers holding appointments in universities. Many others have made valuable contributions to geographical thought who would be described as cartographers, geologists, hydrologists, economists, explorers, urban specialists, or historians. Their contribution may have eventually proved to be more important than anyone realised at the time.
7. 辻田右左男『日本近世の地理学』1971. 筆者はこのなかで、従来地理学と全く無縁と考えられた近世の思想家、知識人を広義の地理学者と考え、その業績を探究した。なお辻田右左男「日本近世の地理思想」奈良女子大学文学部『研究年報』XI (1967), XII (1968) 参照.
8. 木内信蔵「アウトサイダーの地理研究」(渡辺光教授退官記念会『現代の地理学』1970, 所収.)
9. 1975年8月から、小川琢治・山崎直方2氏の小伝を平行して執筆したが、1976年2月、ベッドフォード雪子夫人の助力により、「山崎直方伝」のみ完成、*Geographers : Biobibliographical Studies*, Vol. 1 に収録、76年末ロンドンで刊行された。
10. Max Sorre, *Rencontres de la Géographie et de la Sociologie*, 1957, p. 34.
11. J. K. Wright, *Terrae Incognita : The Place of the Imagination in Geography*, in *Human Nature in Geography*, 1966, pp. 68-88. Wright は同じ本の他の個所で、「小説家のなかには一般大衆にきわめて重要な意味をもつ地理的事物に対し、専門の学者以上に明瞭な vision をもつ人々がいる」(同書p. 22)と書き、地理学に対する文学の merit を説いている。地理学者 H. R. Mill も地理的小説は歴史小説よりも有益で信用が置けると記した。
12. Richard Hartshorne, *The Nature of Geography*, 1967 (3rd Ed.)
13. Carl Sauer, *The Education of Geographers*, A. A. A. G. 1956.
14. Defoe の biography は多いが、ここでは W. P. Trent, *Daniel Defoe*, 1971 (1st. ed. 1916) M. E. Novak, *Defoe and the Nature of Man*, 1963, J. Sutherland, *Daniel Defoe*, 1971 などを主として参照。そのほか Defoe の各著作の Introduction における小伝十数種類参照した。
15. Academy は1662年以後生れ、その数は少くとも38あった。非国教派の牧師を養成するのが主な目的であった。J. G. クラウザー著、鎮目恭夫訳、『産業革命期の科学者たち』, 1964, p. 171.
16. T. S. アシュトン著、中川敬一郎訳、『産業革命』(岩波文庫) p. 30.
17. 当時の用法によると Trade とは、生産者に(のちには資本家に)剰余価値をもたらす産業ことに製造業を意味することばであった。小林昇「経済思想史にあらわれた‘移行’の問題」大塚久雄ほか編『西洋経済史講座』IV, p. 363.
18. Defoe には名作 *The Complete English Tradesman (1725~27)* はじめ商業に関する著述が多い。
19. J. H. Plumb, *Men and Places (Pelican Book)* 1966, p. 299. Defoe は project ということばを好んで用い、彼の最初の著書名も *Essay upon Projects (1697)* である。
20. E. W. Gilbert, *British Pioneers in Geography*, 1972, p. 14.
21. *A General History of the Pyrates 1724*. 1970年代に250年ふりでのこの本の再刻版が出た。(2冊本)

- 20世紀後半、Defoe の人気が高まったことを示すという。
22. *The Life, Adventures, and Pyracies, of the Famous Captain Singleton*, 1721.
 23. Jonathan Swift (1667—1745) *Gulliver's Travels* の著者、ガリバー旅行記はロビンソン＝クルーソーより1年おくれた1720年ころから書きはじめた。この2つの物語は太平洋航海時代の産物 (Crone) といわれるが、想像力の点ではガリバーに凱歌があがるという。松浦高嶺「18世紀のイギリス」、岩波講座『世界歴史』17巻, p. 273. なお松浦高嶺「スウィフトとデフォー—2人の政論家と2つの航海記」『史学雑誌』60:3, 1951参照。
 24. Robert H. (1661—1724) トリー党の領袖, 國務大臣, 初代のオックスフォード伯。Defoe は一時 Harley の片腕 right-hand man として動いた。
 25. F. W. Bateson (ed.) *The Cambridge Bibliography of English Literature*, 1940, Vol. II, p. 497—511.
 26. 中野好夫『スウィフト考』(岩波新書)によれば、月世界旅行は当時ヨーロッパで流行、スウィフトもガリバー旅行記で一部分これにふれ、フランスのシラノ・ド・ベルジュラクは1657年に『月世界旅行』を書いている。
 27. 政治スパイのほか、産業革命を目前にひかえ産業スパイも横行したと大塚氏は述べている。
 28. 『近藤正斉全集』第1。「幽囚後の近藤重蔵」p. 27
 29. S. E. Rasmussen, *London the Unique City* (Pelican Book). 1963, p. 228.
 30. Alexander Selkirk (1676—1721) 彼の漂流談は Woodes Rogers, *A Cruising Voyage round the World*, 1 のなかに収録されていた。
 31. Richard Hakluyt (c. 1552—1616) *Principal Navigations*, 1599. 3 vols, 現在は Everyman's Library 版 8vols. が利用できる。
 32. William Dampier's *New Voyage round the World*, 1697
 33. イギリスだけで704以上の edition があり、ほとんどあらゆる国語に翻訳されている。日本では明治以前、すでに2種類の抄訳があった。豊田実『日本英学史の研究』1939, p. 621以下。
 34. 阿部知二, 『ロビンソン・クルーソー』あとがき (岩波少年文庫) 1976, 第26刷, p. 276.
 35. この地図は Frederik de Wit の Weltkarte, 1673 と非常によく形が似ている。1733年ニュルンベルグから出た J. G. Doppelmayr の世界地図よりはるかに優秀である。Bagrow・Skelton, *Kartographie*, 1973. 増訂版。
 36. K. Marx, *Das Kapital*, Band I S. 90. (向坂逸郎訳, 『マルクス資本論』, I, p. 100以下。)
 37. 17世紀のころ、三文文士たちが屯していたロンドンの街路、現在の Milton Street.
 38. Defoe は 1685年、Monmouth の叛乱に加わり首かせ pillory の刑を受けた。
 39. スミスはイギリスの青年がロビンソンをまねて海外に出ることを心配した。スミスによれば海外旅行は青年に墮落を教えることで、それには大学も責任があるという。
 40. とくに Defoe の *Plan of the English Commerce* では、日常生活にかかわりのある地理学の重要性を強調している。世界の各国民がいかにしてそれぞれの環境を最も効率的に利用し得るかについて述べ、山地や森林のほかなごらの資源をもたないノルウェーやロシアが貿易を考えようとしないのはふしぎであると記している。それに引きかえ北米におけるイギリスの植民地で人々が不毛視されていた土地を開墾した上、商工業を盛んにし、世界中で最も富裕な土地に変えた。スペイン人はただ鉱物を探し求め、将来の隆昌を見ずごしてきた。(Baker, *ibid*, p. 171)
 41. 齊藤勇『イギリス文学史』1958, p. 236 (初版1954)
 42. Defoe の架空旅行記にはロビンソンのほか、W. Dampier の書物と同名の著述がある。ただし副題に「先人未踏のコースによって」とあり、太平洋と南米の地理を詳述し、命題小説 roman à thèse の形式をとった。また *Atlas Maritimus & Commercialis* (1728) には彼の地理学観が記されている。Peter Earle, *The World of Defoe*, 1976, p. 45 ff.
 43. Hermann Moll, 1681—1732 ごろ活動した。ドイツの地図作家、1680ロンドンに移った。
 44. Willem Janszoon Blaeu, 1571—1638, チコ＝ブラへの弟子、オランダの地図学者。彼の世界地図

- の1つを新井白石が見た。現在、国立博物館蔵。
45. この大暴風雨は詳細な資料の残る世界最初のもので一夜で200隻の船を沈めた。田口龍雄『欧米気象学史話』, 1943, p. 15
 46. E. Ysbrant Ides, *Three Years' Travels from Moscow overland to China 1706*, Defoe はピョートル大帝の伝記も (1723) 書いているぐらいであるから、ある程度ロシアの地理に精通していたと思われる。
 47. Avril, *Voyage en divers estats d'Europe et d'Asie pour découvrir un nouveau chemin à la Chine*. 1693に英訳。
 48. Baker, *ibid.* p. 164.
 49. 船越昭生『北方図の歴史』1976, p. 23.
 50. E. G. R. Taylor. *Tudor Geography, 1485—1583*, 1968.
 51. Baker は Singleton の横断ルートを図示している。(ibid, p. 167)
 52. Baker, *ibid.* p. 172.
 53. *Ibid.*, p. 168. So geographers in Afric maps, With savage pictures fill their gaps, And o'er unhabitable downs, Place elephants for want of towns.
 54. 泉谷治訳『疫病流行記』1967, のほかいま1つの日本語がある。前出、歴史家の J. H. Plumb にも *D. D. and The Journal of the Plague Year*, という論文がある。前掲書 p. 302 ff. なお W. S. サッチャー著、金崎肇訳の『経済地理』のなかで、この書物が「プラーグの日記」と訳されているのは一考を要する。(p. 206) *Plague Year* は Defoe の伯父 Henry Foe の手記の形をとっている。
 55. Defoe, *Tour*. Vol. 1. P. 5. とくにことわらない限り *Everyman's Library* 版による。
 56. G. D. H. Cole, *Introduction to Economic History. 1750—1950*, 1952.
 57. 歴史家 G. Unwin は *The Expansion of England, 1883* の著者 J. R. Seeley を *The God of History* と呼んでいるが (Unwin, *Studies in Economic History*, 1958, p. 407) これにならって、やや大げさであるが Defoe をこのように表現してみた。なおシーラーについては「シーラーの英国膨脹史論」(石田憲次『近代英国の諸断面』p. 385 以下。)
 58. H. G. Selfridge, *The Romance of Commerce*, 1923. p. 17.
 59. L. D. Stamp and S. H. Beaver, *The British Isles*, 4th ed. 1954. p. 466.
 60. Flint-stones, chalk-stones, hard gravels, solid hard clay. 等の地質用語が瀬出する。なお Windsor 城のテラス歩道を述べる際、フランスにも、ローマにもナポリにもこんなみごとなものはないと記しこれらが彼の普通地であったことが知られる。(Tour I. p. 303.)
 61. H. G. Darby, *A New Historical Geography of England*, 1973, p. 359.
 62. Camden, *Britannia 1586*, イギリス最初の地誌、その約半世紀前に John Leland の小地誌があった。大塚久雄・吉岡昭彦「リーランドの紀行に見えたる当時の社会分業の状態」(『大塚久雄著作集』第5巻, p. 91 以下。)
 63. Celia Fiennes, *Great Journey*. フィエンス (1662—1741) もまた the seeing eye をもっていたといわれる。好奇心が強く、各地の名物料理を味わい、名産について記した。
 64. D. C. Browning. *Introduction to the Tour through Scotand*, 1962. (Tour の序文)
 65. 境域・経緯度・大きさ (magnitude—Defoe もこのことばを多用した)・山・鉾山・森林・水系・肥沃度・生物など。Baker は *Geography of Bernhard Varenius (1955)* で Varenius の風土記載の項目を列挙している。なお、小野鉄二「西洋地理学史」(岩波講座『地理学』1932参照。)
 66. J. Sutherland, *Daniel Defoe*, 1971, p. 222.
 67. Defoe, *Tour*. Vol. 1. p. 494.
 68. ペティ著、大内兵衛、松川七郎訳、『政治算術』(岩波文庫) p. 34.
 69. ロビンソン・疫病流行記でも統計が多用されている。Tour では Hampshire の数農場の形態を diagram で示し、有用な資料となっている。Tour. Vol. 1. p. 201.
 70. Pat Rogers, (ed.) *Defoe, the Critical Heritage*, 1972, p. 1.

71. Pat Rogers, Introduction of Tour (The Penguin English Library) 1971. p. 22.
72. 柳田国男, 『紀行文集』(帝国文庫), 1930, 解題.
73. 貝原益軒, 「吾妻路の記」「岐蘇路記」(1709)「西北紀行」「南遊紀行」「続諸州めぐり」(1714), Tour より10年前の作品. 益軒の旅も60才を過ぎてからのものが多かった.
74. 「西遊日記」「東遊日記」「辛亥日記」「東北遊日記」等『岩波版, 吉田松陰全集』第7巻(普及版第10巻), なお吉田松陰の生涯を描いた司馬遼太郎氏の『世に棲む日日』1975は史実と虚構の blend されているという意味で Defoe の著作と共通点がある.
75. 例外的にかつて三枝博音博士が海保育陵の『稽古談』(1813年ごろの経済地誌)と Defoe の Tour とを比較されたことがある.
76. 前掲, 齊藤勇, 『イギリス文学史』p. 236.

Summary

Concerning to the geography of Daniel Defoe, the author of famous 'Robinson Crusoe', J. N. L. Baker already discussed in his paper in 1931. But in Japan almost none of geographer noticed about Defoe's geography so far. Present writer read the paper 'Daniel Defoe and Geography' at the meeting of the Human Geographical Society of Japan in June, 1974 and presented its summary in 'Human Geography' Vol. 26 :5. But after that the writer had to engage in the bibliographical work on Japanese geographers by the request of Commission on the History of Geographical Thought (the Chairman, Ph. Pinchemel, the Secretary, T. W. Freeman) of International Geographical Union (IGU). This Commission offered the theme including the problem 'Who is a geographer?' to the members of the work of writing the biobibliography. Seeing the theme of the Commission, the writer was surprised that the definition of geographer of the Commission was so much alike to his presentation which appeared in 'Geography in Modern Japan' in 1971. So, the writer, putting aside the biographical work of IGU, looked back on the geographical works of Daniel Defoe, and examined how Defoe was a geographer in true sense. Reviewing his career as tradesman and journalist, the writer has found how he inclined to geography and its neighbouring disciplines. In 'Robinson Crusoe', especially in 'The Farther Adventures of Robinson Crusoe' and in 'Captain Singleton', there are many interesting topics related to geography. The most characteristic work of him from the side of geography will be 'A Tour thro' the Whole Island of Great Britain' in 1724-6. It was the epoch-making regional geographical work in the form of the travel book, which threw light to the development of British geography, as well as to Japanese geography, if we carefully study this book. As the word 'geographer' means etymologically the reporter of the face of the earth, Daniel Defoe may be called a geographer solely by this work. The writer discussed the furthermore reasons to call him a geographer in this paper, and have appreciated him an unique geographer, far higher-levelled one than the IGU announcement.